

今月も多くの心動かされる作品と出会うことができました。
特に印象に残った作品より。

熱帯夜

ふたりの間で交わされた言葉が
ふたりとも望んでいない方向へ
舟を押しす

春町 美月

「舟」はどこに向かおうとしているのか。言葉が導いてしまう未来がある。「ふたりとも」が「望んでいない」というところに、一度放たれた言葉のとりかえしのつかなさを思います。

扇風機だけが音である

世界に

たったひとつの祈りはあった

音無 早矢

日常の身近なものから奇跡を見出した瞬間が描かれているように思いました。

カーテンを開けた時

誰かの朝になりたくなった

佐々木佑輔

窓の向こうに晴れわたったすがすがしい朝が広がっていたのでしょうか。まっすぐですこやかな願いに、こちらの心にも光が差し込まれるようです。

乗せてくれライダー

君のエンジンと替われるくらい

泣きじゃくるから

伊丹真

発想のおもしろさ。最初の呼びかけもいいですね。泣くという行為が苦しいばかりではなく、先へ進むための原動力になるかのようで、泣きたい気持ちを抱えた人たちが励まされるような作品だと思います。

ばちんと

初めて電球が切れて

この町での暮らしが

部屋を照らした

佐々木佑輔

「電球が切れて」、部屋の中も外もいつもの表情と違って見えたのでしょうか。窓の外から「この町」の灯りが部屋に入ってきたのか、部屋の中にある「この町」で得たものが光を放っていたのか、はっきりとはわかりませんが、「この町」で大切な時間を過ごしていることが静かに伝わってきて、気持ちの輪郭がやわらかくなるような一篇です。

解いた折り鶴を戻せなくなる 長谷川柊香

「解いた折り鶴」はもう鶴ではなく、紙は折り目のついていなかったときに戻ることもできない。その紙を前にした〈私〉の内面がじわじわと伝わってきます。

音だけの花火をきいて迎え盆 ベロニカ

「音だけ」というのが目には見えないけれど、自分の心のなかに確かに存在している彼岸の人と重なります。

きょうという
解かれていない
問いのため
壊れた帽子屋
うごきはじめる 佐藤 美貴子

「きょう」が「解かれていない問い」であるという比喻の鮮やかさ。『不思議の国のアリス』の、時間が止まったため延々とつづけられているお茶会のなかで時を語っていた「壊れた帽子屋」が、お茶会を抜け出しその答えを見つけにいこうとしているのでしょうか。アリス番外編の帽子屋物語がはじまるかのように惹かれました。

ダメージに無垢の名をつけ
わたくしの
桃の表皮を
そっと剥くのだ 佐藤 美貴子

「無垢」と「剥く」。音と意味の響き合い。桃はダメージを受けやすい果物、ほんのすこし触れただけでも傷んでしまう。自分の傷を癒そうとする繊細な手つきがイメージされました。

蝉しぐれ今日も明日も蝉しぐれ
おなじものなどなにもないのに 金澤 春葉

今日鳴いている蝉は明日にはもう死んでいるかもしれない。同じように聞こえてきても明日の蝉しぐれは今日とは違う蝉しぐれ。この世の誰もが一回限りの生を生きている。

植物の名前覚えてる
ひとになる
世界を燃やしても許されるから 真島

どこかぎこちない言い回しで書かれた「植物の名前覚えてる／ひとになる」ことが「世界を燃やしても許される」ことにつながる詩のなかの論理に惹かれます。

好きな歌を
君に教えてしまうとき
窓を開いて聞く風の音 桜望子

自分の「好きな歌」は大切な秘密のひとつ。「君」に秘密を明かすことのおそれと喜びが伝わってきて、震える想いがまぶしく感じられました。